韓国ドラマ・映画の感想

（武内ブログより抜粋）

A

韓国ドラマ「ある春の夜に」を観る

ネットフリクスで放映されている韓国ドラマ「ある春の夜に」全１５話を見終わった。

少し前に見た「梨泰院クラス」とはまた別の意味で、よくできたドラマだなと思った。

今、韓国のドラマは、皆このようレベルのものなのであろうか。日本で今このレベルの

テレビドラマは作られていないのではないか。

韓国の若い人（30歳代）が主人公のドラマで、日本では昨年の７月にネットフリクスで放映されている。中身は、韓国の若い人の恋愛ドラマで、恋愛の障壁になるライバルや家族関係などさまざまあり、二人の心も揺れ動き、見ていてハラハラする。ヒロインの韓国女性（ハン・ジミン主演）が、知的で、勝ち気でありながら、心優しいために悩み、相手の男性（チョン・へイン主演）もとてもさわやかな優しい青年である。見ていて、二人の関係がほほえましく、応援したくなる。演技が自然で、ドラマの見ているというよりは、知り合いの若いカップルを見ているような気になる。

惹かれあった二人の会話が、スリリングで面白い。日本人の会話とは何か違うような気がする。そこが韓国ドラマの面白さなのかもしれない。ただ、何が違うのかは明確にわからない。表面的などうでもいい会話というものが少ない。一つ一つの言葉に皆深い意味がある。発した言葉で、相手が驚くと、それは「冗談」と打ち消すことがしばしばある。そのようなことでシリアスなことをさりげなく言うことも多い。ホンネで話すので、その発せられる言葉で、相手が傷つき突然怒りだし、二人の関係が危うくこともしばしばある。とにかく会話に緊迫感がある。でも相手が好きだということが、言葉や表情から伝わってくる。それだけ演技がうまいのかもしれない。

韓国の若い人にとって恋愛は大きな価値で、運命の人との出会いという言葉もよく出てくる。親世代の結婚生活はあまりいいものとして描かれていない。今の韓国でも、結婚には親の許可が絶対必要のようで、結婚の許可を親から得るのが大きなテーマになっている。バックの音楽はたくさんのOSTが流れる「梨泰院クラス」とは違って、「ある春の夜に」は、数少ない同じ主題歌が何度も流れる。

B

韓国ドラマ「マイ・ディア・ミスター」を見る

韓国ドラマ　「マイ・ディア・ミスター　（私のおじさん）」第16話を、ネットフリクスで見終わった。

見終わるのに1ヵ月くらいはかかったように思う。人に薦められて見はじめたが、最初の方は何か暗く、韓国の庶民階層の暗い生活がいくつも、脈絡もなく描かれているようで訳が分からず、かなり早い回で見るのをやめてしまった。その後断続的に見て、後半になるとあまりにドラマチックで次の展開が読めず、ハラハラドキドキしながら見た。人生に敗れた人々が酒を一緒に飲み、傷を嘗め合いながら何とか生きていくもどかしい場面も多くありながら、何か温まるストーリーであった。

韓国では家族の繋がりが強い、兄弟がこんなに仲がいいのか、同郷の絆も強い、学校の先輩後輩関係は後まで響くなど、日本との違いも知った。

このドラマは、中心の二人だけでなく、脇役の人たちの人生も味わい深い。特に、ヒロインも含め個性的で魅力的な4人の女性が登場しているのもいい。

ネットから感想を少し、転載しておく。私と同じような感想が綴られている。

「とても良いドラマでした。最初は良さがわかりませんでしたが、それぞれの心の動きや相手に対する気持ちの変化が見えて来て、どんどん嵌まって行くドラマです。本筋を支えるそれぞれの出来事も涙と笑いが満載で楽しめます。とてもお薦めのドラマです」「こんなに不幸な人も珍しいというくらいにヒロインが悲惨な人生を歩んでいるなかで、出会った男性。そこで少しずつ笑顔を取り戻していく感じが良いですね。始めは救いようがないダークなドラマだと思っていたものの、どん底から這い上がることも出来るかもしれないと勇気をもらえました」「ヒロインが孤独や多額の借金を抱えていて人生に対して諦めのように感じている状況からすこしずつ心を開いていくという展開がとても素晴らしいです。あまりにも重い内容に始めは戸惑いましたが、見ていくうちにすっかりはまってしまいました」「辛い人生をいきる女性とその女性を取り巻く人々。目を背けたくなるようなシリアスな場面もあるけれど、人生について考えさせられる時間を与えてくれました」「歌手であるアイユの演技が素晴らしい。財閥、記憶喪失、復讐などのテーマがほとんどの韓国ドラマの中で、このテーマは普通っぽくて良かった。イ・ソンギュンが個人的には一番好きな俳優なので、どの作品も見ているが、コミカルな役が多い中、このドラマの冴えない会社員はとても良かった」「始まりは不純だけど、その後の展開がどうなるか分からないっていうストーリーがありますよね？『マイ・ディア・ミスター〜私のおじさん〜』はそんな作品だと思います。〔ドンフン〕（演：イ・ソンギュン）と〔イ･ジアン〕（演：ＩＵ／アイユー）の不思議な関係がどうなっていくのか、あなたのその目で確認してみて下さい！」「序盤の物語が重いというか暗い感じなので、なかなか見続ける事が辛いのですが、見終わってみれば、人情物語であたたかな気持ちになれます。優しい人間に癒される、そんなドラマです。」

C

韓国ドラマ「マイ　ディア　ミスター」の感想（その２）

韓国ドラマ「マイ　ディア　ミスター」の人間関係は、どの関係も皆ギクシャクしている。それは、現代社会の人間関係がそれだけ難しくなっているということの表れでもある。

唯一安定しているのは、生育家族（生まれ育った家族）の人間関係である。韓国の伝統的な家族主義的な関係が結局基本にあるように描かれている。子どもが大きくなっても母親が子どもを思い、子どもも母親を一番大切にする。兄弟は喧嘩しながらもお互いを気遣い、兄弟の幸せや悲しみを共有する。生育家族との関係が強すぎて、主人公（ドンフン）の夫婦関係はうまくいかない（奥さんは主人公が最も嫌う男と浮気までする）。

主人公（ドンフン）の兄(サンフン)は職場を首になり、家で酒ばかり飲み、娘の結婚の御祝儀をねこばばまでするようになり、奥さんに愛想をつかされる。弟（ギフン）は、映画監督として一度脚光を浴びたものの才能のなさに気付き、主演女優にその責任を押し付け、その罪悪感とその女優への愛情と後ろめたさから、慕ってくれる彼女の気持ちを受けとめられない。天才肌の友人は、理想的な近代家族の限界を感じ、相思相愛だった女性と別れ、僧侶になってしまう。

主人公とヒロイン（イ・ジアン）の関係は、上司と部下、叔父と姪（父と娘）、援助者と被援助者、詐欺の標的、恋人関係、というさまざまな要素を内包しながら動的に展開し、最後に行きつくところはどこなのかわからず、ハラハラさせられる。

現代は、伝統的社会の安定した家族関係、近代社会の友愛を基礎にて成立する核家族ではやっていけなくて、さまざまな人間関係が交錯する中で、皆苦しみながらも、過去は「どうってことない」と目をつぶり、「ファイト」と未来に向けて歩く（時に「かけっこ」もする）生き方（「リジリエンス」な生き方）をする時なのであろう。そのようなことを考えさせられるドラマである。

　ドラマの中で、ヒロインは主人公に「ファイト」と励ます場面がある。あまり関係はないが、中島みゆきの「ファイト」を、吉田拓郎の歌で聴きたくなる。「戦う君の歌を　戦わない奴らが　笑うだろう　ファイト　冷たい水の中を　震えながら　登っていけ」という歌詞が印象的。社会学は自分では戦わないくせに戦う人を冷笑する傾向がある。自戒したい。

D

韓国ドラマ「愛の不時着」を観る

韓国ドラマ「愛の不時着」全16話をネットフリクスで観た。話題のドラマだけあって、よくできたドラマだと思う。ブームを引き起こしたことが納得できる。

ジエンダーの視点からも現代にマッチしているようだ。その分、旧いジェンダー意識に囚われている人にはそのよさがわからず、ジェンダー意識の「踏み絵」にもなるドラマのようだ。

ネットで書かれていることを少し書き写しておこう。

「韓流ドラマ今まで見た事なかったけど、初めて愛の不時着を見てはまった。こんなに面白いとは。日本のドラマみたいに視聴者がイライラするシーンがなく、基本的にこうなってほしいと思う方向に物事が動いてくれる。見ていて気持ちいいドラマ」

「本当に『人を愛する』とはどういう事かをこれでもかと見せつけられたドラマでした。両国の関係を考えると限りなく切なく、でも離れてもそばにいるという二人の愛は限りなく温かい。ただ、リ・ジョンヒョクの様な完璧な男性は絶対に居ない！　だからこれはファンタジーで、だから何度でも観てしまう。セリとリ・ジョンヒョクに逢うために…」

「最近の韓流ドラマのヒロインは、ひと昔前の可憐で受け身タイプの女性から、男性に頼らず自分の将来を自分の力で切り拓いていく、元気で活発なタイプへと変わってきている。『愛の不時着』のセリも、財閥の令嬢でありながら、自らファッションブランドを立ち上げて成功させたビジネスウーマンであり、愛する男のために命まで投げ出すほど愛に積極的な女性だ」

「ヒロインは美しいだけでなく経済的に自立しており、ヒーローを守る強さを持っている。2人の主演俳優が見せる素晴らしい演技力に加え、ジェンダー・ステレオタイプを覆すキャラクターの魅力が、古典的な「愛」をモチーフにしたドラマを格段に面白くしている」 　「完璧に対等な男女の、壮大な恋愛ファンタジー」

「日本でよく見聞きする『弱い女を守ってやる俺』的な、単なるイキリやマッチョな誇示とは別物です。ジョンヒョクがセリに麺を打ったりコーヒーを豆から煎ったりするのも、銃撃戦で体を張るのも「守る」の一環。」

「このドラマで描かれているのは、強い男が愛する女を守り抜くという、伝統的な性別役割分担に基づく恋愛だけではない。リ・ジョンヒョクは、これまで女性たちが愛という名の下に、家族のためにしてきた「無償ケア労働」を、セリのために黙々とこなす。

「さらに重要なのは、これがラブ「コメディ」であることだ。視聴者は何度も泣かされるが、暗い気分は長引かない。泣けるシーンの次に絶妙な「笑い」を入れてくる」

「良質なコンテンツはイデオロギーを超える力を持っている。」

「いかに気持ちを伝え、確かめ合い、未来を描けるようになるかという心の動き」「ひと昔前の韓流ドラマのように家柄や親は障害ではなく、絶対的な一線、つまり38度線だけが2人の愛を阻む。ソン・イェジンとヒョンビンと言うキャリアや人気が互角のスターを揃えたキャスティングも含め、『対等さ』を意識したドラマ」

「「悪役であるセリの義姉たちも、坊っちゃん育ちの夫をコントロールして生きる力が強くて憎めない。北のオンニたちはそれぞれの個性が際立っているし、とにかく女性がものを言う。ミソジニー（女性に対する嫌悪や蔑視）が一切ないのがこのドラマの素晴らしいところ」。

「「推し」の視点を大事にしているドラマ。（それは）好きな相手が幸せだったらそれでいいという、究極の尊い気持ち」

「日本が朝鮮半島にしたこと、戦争の加害を思うといたたまれず、「早く統一されればいいですね」といった気楽な感想を口にすることはできない」

 「ユン・セリ役を演じたソン・イェジンはまさに神の一手だった。女性視聴者の共感を得られる抜群の演技力と、男性視聴者をテレビの前に釘付けにできる美貌を兼ね備えた女優」　 「「愛の不時着」は悲劇の「ロミオとジュリエット」になるはずの2人が、愛と知力と財力でサバイブして「織姫と彦星」となる物語」。 https://news.yahoo.co.jp/articles

　このドラマは今人気でネットフリックスでも日本の視聴の1位になっている。

7月31日の朝日新聞朝刊に「『愛の不時着』にハマって」という見出しで、内田樹氏ら3氏のコメントが載っているが、その主な理由がこの3氏が書いているような北朝鮮の人々の様子がリアルに描かれているからというのとは違うと思う。やはり人気は主役の二人の関係（純愛とその成就に向けての行動）にあるのではないか。編集部の意図と3氏のコメントのズレを感じる。

E

韓国ドラマ「よくおごってくれる綺麗なお姉さん」（2018）を観る

今ネットフリクスで1番人気の韓国ドラマ「愛の不時着」（2019-20）のヒロインを演じているソン・イェジンが、その前に主演しているドラマ「よくおごってくれる綺麗なお姉さん」（2018）を、ネットフリクスでみた。

これをみたのは、ソン・イェジンが主演しているという理由と、先にみた「ある春の夜に」（2019）と同じ演出家のアン・パクソンの作品ということによる。

主演のソン・イェジンは、「愛の不時着」のヒットで、今世界で一番輝いている女優かもしれない。1882年生まれで30代半ばである。このドラマは、年下の恋人（「ある春の夜に」のチョン・へインが演じている、1988年生まれ、31歳）との恋愛が主要はテーマである。ここでの二人の恋愛を阻むものは、周囲の家族で、とりわけヒロインの母親の家柄や学歴や職業へのこだわりは強烈で、見ている方は癖癖する。このドラマは、恋愛への純粋な思い（「その人と少しでもいっしょにいたい」や「その人に為なら何でもする」）を、思い出させるものであり、韓流ドラマの主流を行くもの1つなのであろう。ネットから、感想をピックアップしておく。

「たまたま観始めたら愛の不時着のヒロイン役したソン・イェジンさんが出てました」「ソン・イェジンの演技力の高さは、いかなる立場の女性をもリアルに表現していて韓国は制作も巧みな上に良い俳優がいて、基盤の強さを確信した作品」

「前半幸せすぎて、色んな韓ドラ見てきた中でも一番幸せになった。ソン・イェジンの演技が上手すぎて、感情移入してしまった」

「ジュニみたいな彼氏最高だ。こんなに愛されるジナが羨ましいって感情移入できるのも、ソン・イェジンの演技が素晴らしいってことかも知れない」

「私はこのドラマ大好きです。ジナがお母さんに殴られてる時にジュニが庇うようにハグして心配していたシーンが忘れられません。素敵な愛だなって素直に思いました。2人の本当の愛を見ててドキドキしたし、あぁこんな風に愛されたり、愛してみたいなって思うドラマでした。2人のイチャつくシーンが最高すぎて永遠に見れます！！」

「年下のジュニがほんと、ジナだけを愛していて、ここでもあんなに愛され愛する人のいるのって、超羨ましい！！って思いましたよ」

「今まで見てきた韓ドラは恋愛物やけどサスペンス要素とかファンタジー要素があるものばっかりだったので、恋愛だけのドラマは初めてで新鮮でした。個人的にすっごいハマって見出したら止まらないと言うよりかは、少しずつゆっくり見れたドラマです。終始ジナのお母さんに腹立ちすぎてイライラしましたが、それぐらい出演者の方たちの演技が上手くて自然で面白かったです」

「この作品は親子の愛情や、同期愛、親友との愛情など様々な愛が描かれていて、主人公に自分を投影してプリンセス気分を味わうような心地よいだけの作品ではない。傘の色で、お互いを激しく思い合う恋情を表す赤、落ち着いて愛情を育む緑、君に決めた！の黄色だったり、小物や着ている服の色で移りゆく感情を見せているような、映像の色味も美しかった。全体的にじんわり愛情を感じられるドラマだった」

「私も40歳になってもこんな綺麗なお姉さんでいたいって思えるドラマでした！」

「セクハラの話だって、女性なら働いてる大半の人が共感できすぎて怖いくらい。親も(この話では特に母がひたすら気分が悪くなるほどに)うるさい。ひたすらに体裁を気にして、面子を気にして、でもそれって自分のためだからね。はー、嫌な人間すぎる」

「前半に沢山楽しい部分あったのに、後半のインパクトが強すぎ。お母さん怖すぎ。恐怖って感じ」

「後半から大号泣。ジナには、ジュニが必要でジュニには、ジナが必要。沢山キュンキュンした。めちゃおススメ。早く2人とも結婚して！！！」

「 ostも古風？な感じで珍しい」 https://filmarks.com/dramas/1374/2796

F

韓国映画『私の頭の中の消しゴム』（2004）をみる

自分は少しミーハーで流行を追いかけているように思っていたが、そうではないことを知った。15年前に流行った映画のことをほとんど知らなかった。映画『私の頭の中の消しゴム』（2004年）を、ソン・イェジンが主演というので今回はじめてみた。 日本で上映された韓国の興行映画のうち、歴代2位の記録を持つ映画である。当時全く知らなかった 。

よくできた映画だと思った。アカデミー賞映画『パラサイト』（2019年）より、出来はいいのではないかと感じた。今回もネットの解説を転載しておく。

「号泣必至の不朽の名作！『私の頭の中の消しゴム』消えゆく記憶に負けぬ愛エンタテインメント」

「建設会社の社長令嬢のスジンと、建築家志望の建築作業員チョルスは運命的な出会いで恋に落ちる。チョルスは育った環境の違いから結婚を拒んでいたが、スジンの献身的な愛に結婚を決意するのだった。チョルスが建築士の試験に合格し、幸せな新婚生活を送っていた矢先、スジンは自分の家への道順すら忘れてしまうほど物忘れが激しくなる。病院で検査をすると、若年性アルツハイマー症だと診断されて･･･」

「原作は日本のドラマ『Pure Soul～君が僕を忘れても～』（2001年、読売テレビ制作）。原作では、序盤ですぐに妻の病が発覚し、そこからの家族のストーリーが濃密に描かれているが、この映画ではスジンとチョルスのコンビニでの運命的な出会いから、結婚にいたるまでの葛藤、そして愛情を深めていく過程に重きを置いている。不倫相手の上司に裏切られて心に傷を負ったスジンが、口は悪いが心が温かく純朴なチョルスに好意を抱き、孤独に生きてきたチョルスは、温かい家庭で育った天真爛漫なスジンに惹かれてゆく。お互いに欠けたものを求めるように愛しあい、お互いの傷を癒してゆくのがとても自然に描かれて感動的。また、スジンの説得によって、チョルスが自分を捨てた母親を許すエピソードも、2人の愛の深まりを感じさせる効果的なスパイスになっている。シンプルなストーリーだが、印象的なエピソードの積み重ねが心に残り、2人の愛が美しくドラマチックなほど、スジンがその記憶を失ってしまうことが一層悲しく感じられる。コカ・コーラ、トランプの手品、バッティングセンター、チョルスのローションなどのキーアイテムの織り交ぜ方や、スジンの気持ちの高まりを表現するように流れるオペラやラテン系の音楽も印象的だ。

ヒロインは、ドラマ『愛の不時着』で再びの全盛期を迎えているソン・イェジン。2003年にドラマ『夏の香り』や、映画『ラブストーリー』で人気を博した彼女は、その翌年に本作に出演。不倫に涙して化粧がドロドロに落ちた顔から、お嬢様らしい品のある表情、チョルスの前で魅せる満面の笑顔、病気を知っての絶望に陥った表情、そして記憶を失くした虚無の表情までを繊細に表現し、”メロドラマの女王”との称号を得た。 一方、チョルス役のチョン・ウソンは、ドラマには滅多に出演しない根っからの映画俳優。アウトローのイメージで、男くさい作品に出演することが多かったが、本作ではそのイメージを活かしつつもラブストーリーということで女性ファンが倍増。」（安部裕子　<https://allabout.co.jp/gm/gp/1193/>）

G

韓国ドラマ「梨泰院クラス」をみる

私が韓国ドラマをみるのは、「冬のソナタ」以来だが、今回みた韓国ドラマは面白くて、少しハマリそう。それは、3月28日からNetflixでみることができる韓国ドラマ「梨泰

院クラス」。JTBCドラマの歴代視聴率２位というだけあって、毎回内容が濃い（16話まである）。韓国人の気質もよくわかる。（https://nigerugakachi.com/itewonclass/）

日本のテレビドラマは、（NHKになかなかいいものがあると思うが）、民放のドラマは、中身がスカスカで、コマ―シャルが多く、1話ぐらいいいものがあっても、それは続

かず、落胆させられるものが多い。

（4月15日）16話を見終わった。10話以降は、1日に2～3話を続けてみて、今日は少し梨泰院クラスロス状態。 16話も見ると、その世界や登場人物が日常的になり、ドラ

マが終わってしまうとその喪失感は大きい。

韓国ドラマながら、共感できる部分が多く、日韓の共通点を感じた。このドラマに描かれ優位な価値観に関して、感じたことを書いておきたい

1. 強い信念に基づく一途な行動、困難に立ち向かう果敢な行動、がメインテーマのひとつ。
2. 仲間（友情、恋愛）の大切さがもうひとつのテーマ　③　①と②の組み合わせで人間の4類型ができる。（Ａ―信念・仲間、Ｂ―信念のみ　Ｃ―仲間のみ、Ｄ－信念も仲間もなし＝損得と利己的行動。）主人公のセロイとその仲間はＡ類型が多く、敵役はＤ類型が多い。④　中で描かれている恋愛関係は、一歩方向（片思い）が多い（グンス→イソ、イソ→セロイ、セロイ→スマ←グオン）。ただその片思いは秘めているのではなく、はっきり公言され、その成就に向かう努力が評価される（失恋で泣く様子も激しいが）⑤　韓国は学歴社会といわれるが、主人公のセロイは中卒・高校中退で、ヒロイン・イソも超優秀ながら高卒である。学歴に価値は置かれていない。強い信念と行動が評価されている。セロイの初恋の相手スアは超美人で、大卒で控え目な女性だが、信念が弱く、そのような女性は韓国では生きにくい。⑤　母親はほとんど出てこず、いても影響力は小さい。強い父親が求められていて、その父親の信念に基づく行動（背中）が心の支えという息子が多い。信義や仲間を大切にしない父親からは、問題児が育っていると描かれている?　登場人物の日常に交される会話は、ひとつ一つの言葉は短いが、ホンネ（本質）をズバリと発していて、緊迫感がある。相手の言葉に「エ？！」と驚く場面が多い（毎回、数場面あるのではないか）。主人公セロイをめぐるヒロイン・イソと初恋相手のスアの会話のレベル（緊迫感）は、漱石の「明暗」の中の、二人の女性の会話のそれに匹敵する高さと感じた。

（今は「梨泰院クラス」はネットフリクスでしか見ることしかできないが、見た人は、その面白さにハマルと思う。バックの音楽もいい。今他の映画やドラマをみると物足りなく感じる。）https://www.netflix.com/jp/title/81193309

H

「梨泰院クラス」のOST

１

韓国ドラマ「梨泰院クラス」をまだ、時々見ることがある。主役のセロイはなぜ初恋で10年も思い続けてきた心優しいスマを振って、事業（復讐）パートナーのイソの方を選んだのか。控え目の女性（スマ）より、自分の人生を自分の力で切り開き好きな男を守る積極的な女性（イソ）の方を選択したのは、それが自分の生き方に合っているからであろうか。しかし、まだ釈然としない部分も残る。

それは、初恋同士の二人の心情の中にもあり、二人とも前に向かって進む以上は、別れは仕方がないと思いながら、そのような選択しかできない生きることの哀しみを感じているのではないか。その哀しみがバックの音楽（OST）があらわしているように思う。

(これは私の勝手な解釈で、本当は人生は苦難の連続だ、というドラマの前半の哀しみを表す歌なんだと思うが、二人の気持ちからいうと、このようにも取れるのではないか。目を伏せて歌う歌手の沈んだトーンがこの感情をよくあらわしているように思う）

２

先に書いたが、「梨泰院クラス」のOST（ https://coneru-web.com/itaewonclass-ost/ ）の4番目（가호 \_ 시작(밴드 ver.) [Live]と、6番目（하현우 \_ 돌덩이 [Live]）の男の子とバンドの歌が特に印象的。8番目の女の子の失恋の歌もいい。k-ポップはこれまで聴いたことがないので、有名な歌手やバンドなのかどうかわからないが、こんなレベルの音楽が韓国には多いとすると、音楽的に日本の先を行っているなと思う。

I

「梨泰院クラス」ロス

今日（6月16日）の朝日新聞も韓流ドラマの再ブームを牽引している「梨泰院クラス」

について言及していた（その部分を転載）

＜韓流ドラマ再ブーム、世界を相手に　「愛の不時着」・「梨泰院クラス」が牽引

　韓流ドラマブームが再燃している。牽引（けんいん）するのは、ネットフリックスで

配信中の「愛の不時着」と「梨泰院（イテウォン）クラス」。日本だけでなく、中東や

東南アジアでも大人気だ。なぜこんなに勢いがあるのか。　■信念ある女性／恋愛＋社

会問題　政府支援、リメイクしやすさも戦略　「自粛生活の唯一の彩り」「もう見るの

は５回目」。ツイッターには連日、両作品への賛辞が並ぶ。あの黒柳徹子さんも「全話

一気に見ました」とインスタグラムでコメントした。　「愛の不時着」は、韓国の財閥

令嬢がパラグライダーの事故で北朝鮮に不時着。出会った北朝鮮軍の将校と恋に落ちる

物語だ。「財閥」「親との確執」など韓流ドラマならではの設定がちりばめられ、韓流

ブームの先駆けとなったドラマ「冬のソナタ」（２００２年）の出演者も登場。王道の

恋愛ストーリーを笑いとペーソスでもり立てる。　「梨泰院クラス」は、ある親子に人生を狂わせられた青年が、仲間と一緒に巨大飲食店チェーンに挑む。人気ウェブ漫画が原作のテンポの良い復讐（ふくしゅう）劇だ。　両作品とも、韓国で放送された後、ネットフリックスで世界配信されると、瞬く間に人気ランキングの上位に入り、トップ１０以内を保つ。中東や東南アジアのメディアでも次々と紹介され、ブームになっている。　人気を支えるのは、働く世代からの共感だ。いずれの作品も、登場する女性に上昇志向や愛する男を守る強さがあり、自分の生き方に信念を持っている。決して善人とは言えないずるさも描かれる。男たちは、そうしたヒロインの自主性を大切にし

J

 韓国ドラマ「彼女はキレイだった」を見始める

2015年の韓国ドラマ「彼女はキレイだった」をネットフリクスで見始めた。最初「なんか失礼な題だな」と思ったが、ストーリーを知って納得した。女性が「キレイ」ということはどういうことなのかといろいろ考えさせられた。男はキレイな女性に惹かれるのは古今東西普遍的のようだが、それはなぜなのだろう。（女性がイケメンの男子に惹かれることもあるが、男のそれには及ばない）。

第1話のストーリーは次のよう。＜（ヒロイン）ヘジンは小学生のころ相思相愛だったソンジュンがアメリカから帰国するとのメールを受け、（親友）ハリに待ち合わせ場所まで送ってもらう。そこに現れたソンジュンは肥満児だった過去をみじんも感じさせないイケメンに成長しており、正反対の残念な女性に成長した自分を恥じたヘジンは、（超美人の）ハリに自分の代役を頼み…。＞

最近大人気の韓国ドラマ「梨泰院クラス」の中卒で前科者で飲み屋の社長の男ぽいヒーローのパク・セロイを演じたパク・ソジュンが、このドラマではアメリカ帰りの育ちがよくかっこいいイケメンを演じていて、最初その育ちの品のよさから同一人物とは思えず、思わずネットで調べてしまった（パク・ソジュンが好きな女性ファンにはたまらないであろう）。

女性が綺麗であると男からちやほやされることが多いが、それに奢れることなく、懸命に生き、いい性格ややさしい心情を保持することは難しいのではないか。その点そうでない女性の方が、努力家でいい性格でやさしい心根の人が多い（、と私は思う）。ところが愚かなことに、男は美人の方に惹かれる。

「彼女はキレイだった」のヒロインは、そのことがわかっていて、幼馴染のイケメンに自分の正体を明かせず、超美人の友人に代わりになってもらう。そこに悲しみがないわけではないが、持ち前の元気さと笑いで吹き飛ばすのが、このドラマの魅力である。

＜追記＞もちろん女性が綺麗になるように努力することは、自分の顔や体を素材に美を追求することであり、画家がキャンバスを素材に美を追求するのと変わらないことで、非難されるべきことではない。また男が女性の綺麗さに惹かれるのは、美しい絵や美しいものに惹かれるのと同様で、自然なことであると思う。

K

韓国ドラマ「屋根裏のプリンス」を観る

韓国ドラマ「屋根裏のプリンス」(2012年）全20回を、アマゾンで観た。「前半は抱腹絶倒、後半はサスペンスと涙の連続」というのが一般的の評のよう。私は、見終わるのに2週間はかかった。ラブコメとして楽しめばいいドラマのようであるが、シリアスなドラマとしてみると、少しストーリーに無理を感じる。ヒロイン（ヘン・ジミン主演）の自己犠牲や輪廻の考え方に魅かれた。

ヒロインの名前は、プヨン＝パク・ハで、それは蓮の花を意味ずる。「生きて死に、死んで生きるものは何か？」という謎かけがドラマの中であったが、その答えが蓮の花。蓮の花は咲き終わると朽ちて土にまみえるが、次の花の糧になり生きる。このように蓮の花は自己犠牲に徹し、美しく咲き、哀しく散る。

私は別に輪廻転生を信じるものではないが、このドラマが輪廻転生のドラマであり、その象徴である蓮の花の名前のヒロインの自己犠牲や、 七夕の輪廻転生（天の川） や、先日千葉公園で観た蓮の花の美しさが、何か繋がっているように感じ、惹かれるものがあった。

L

韓国映画「虐待の証明」を観る

このところ韓国のドラマばかり見ている。そこで、今度は韓国の映画を見てみようと思い、韓国ドラマ「ある春の夜に」でヒロインを演じていたハン・ジミンが主人公を演じ、第38回韓国映画評論家協会賞で主演女優賞を受賞した映画「虐待の証明」（ミス・ペク）を、レンタルして観た。ドラマの紹介や感想は、ネットで次のように書いてあった。

＜あらすじー母親から虐待され、捨てられて施設で育ったペク・サンアは、心に傷を抱えたまま生きていた。彼女は荒んだ生活を送り、周囲からは「ミス・ペク」と呼ばれ揶揄されていた。そんなある日の夜、サンアは道路の片隅で震えている少女ジウンと出会う。お腹を空かせたジウンの体は痣だらけで、誰かに虐待を受けているのは明らかだった。目の前の少女と過去の自分とを重ね合わせたサンアは、ジウンに手を差し伸べようとするが―。＞　＜感想―①韓国の実話もの～虐待シーンは韓国ならではのリアルな描写で描かれてて、観てて辛かった　②警察の対応の無能っぷり、虐待親の腹正しさ、子供が傷つけられるのはきついなぁ、これを観て寝るのはムカムカする＞（https://filmarks.com/movies/81176

私の見終わった感想は、あまりはっきりしたものでない。いくつかあげると,①テーマは子どもへの虐待で、事実に基づいた映画ということで、決して明るい内容ではなく、気分的には沈んでしまう映画である。②児童虐待が韓国でも日本と同じように社会問題になっていることがわかった。児童虐待をする親は、自分も虐待された経験があるという負の連鎖が示唆されている。警察や児童相談所の対応の遅さやいい加減さは、日本と同じように描かれている。しかし児童虐待の酷さ、警察の取り調べの凄さ（容疑者を殴っている）、刑の重さ（殺人罪が適用される）は、日本より韓国がより強烈のように感じた。③　有名女優のハン・ジミンが、よくここまで、泥だらけの体当たり役を演じるものだと感心した。そしてハン・ジミンらしさも出ていたように思う。④　映画としては、韓国らしく、また出演者の演技は上手で、バックの音楽も沈痛ながらよく、よくできた映画なのであろう。児童虐待を扱っている映画だが、もう少し別の観点からみた方がいいのかもしれないと思った。

（これは私の偏見も入っているかもしれないが）韓国人の国民性に関しては、「かなり粗野で、激情型で、しかも情が厚い」という印象がある。それがこの映画「虐待の証明」にはよく現れている。主人公だけでなく、脇役の刑事もその姉も粗暴ながら情が厚く、虐待された子どもを結局は引き取り大事に育てるようになる。韓国は、急速な近代化を果たし、生活様式は近代化し、ドラマ「ある春の夜に」に描かれているように、若い人はおしゃれで人柄もソフィスケートされているが、その奥底の心情には、情が厚く激情的なものが存在し、時々それが噴き出すのではないか。日本人もかってはそうであったが、韓国より先に進んだ近代化で、それが消えていったのでなないか。日本でも1950年代中頃から60年代末に吹き荒れた「大学闘争」の時は、学生がゲバ棒や火炎瓶を持ち、機動隊に立ち向かって行ったり内ゲバで殺し合ったりしていた。そのような激情は現代の日本の若者にはない。そのようなことをこの映画から感じた。

M

相手を思いやるということ

「相手を思いやる」や「相手の立場に立って考える」ということは、道徳教育の項目にもあがっているし、多文化教育の「転換アプローチ」（相手の立場から考える）もそうであり、重要なことである。しかし、実際は行き違いもあり、次元の違いもあり難しい。

こちらが相手のことを思いやって言ったり行動したりしても、その言動が理解されず、恨まれる場合がある。さらにややこしくなるのは、相手もこちらを思いやっている場合である。その思いやりが自分を傷つける場合がある。それも、お互いを思うゆえにである。

親がゲームばかりしている子どもを叱り、ゲームを辞めさせるのは、ゲームをしたいという子どもの意向を禁止する、思いやりのない行動ではなく、子どもの将来を考えた思いやり行動である。自分に片思いの相手に冷たくするのは、相手に自分に対する未練を早く断ち切ってふさわしい人を探してほしい、という思いやり行動である。これらの行動は、今理解されなくても、いずれわかってもらえるので問題はない。ここで問題にしているのは、これとは違う。

今評判の韓国ドラマ「愛の不時着」の15話で、恋人同士がお互いに、警察で自分が罪を被り、相手が罪を免れるような供述をする場面がある。二人はそれぞれ自分を犠牲にしての相手の幸せを願って、このような供述をする。ところが、相手の為を思って自分がした供述（罪は自分の側だけにある）は、自分の幸せを一番願っている相手の願望を真っ向から否定するものである。お互いに相手の為を思った供述が、相手を深く愛する二人故に、お互いの思いとは逆の結果を招く（浅いレベルでは、相手は罪を免れ幸福になるかもしれないが、自分の幸福を何よりも願う相手の願望を否定する）。それでお互いに、死ぬほど傷つく場面がある。（囚人のジレンマの逆？）

シエル・シルヴァスタイン著・村上春樹訳『おおきな木』（あすなろ書房、2010）では、リンゴの木は少年が好きで。その願いをかなえることに生きがいを感じている。少年に、自身（リンゴ）の実、枝、幹を提供し、自分は切り株になっても後悔はしない。少年の為になることが至上の願望だからである。一方少年は、そのリンゴの願望を当たり前のことと考え、リンゴの木が自分に幹まで提供し切り株になっても、それがリンゴの願望をかなえることなので、悪いことをしたという意識はない(読者もそう読む）。

この「愛の不時着」と「大きな木」の意識の違いは何なのであろう。前者は恋人同士であり、後者は母―子関係だからであろうか。前者は対等であり、後者は母親の子どもへの無償の愛が前提になっているからであろうか。（ドラマ「屋根裏のプリンス」の場合、片思いの側の相手への無償の愛の要素もあり、後者に近い面もある。）このように、ものごとには、深さもあり、相手の気持ちもあり、一筋縄ではいかない。

N

韓国映画「パラサイト―半地下の家族」の評価

今年度のアカデミー賞を受賞した韓国映画「パラサイト」を見た（劇場ではなく、レンタルしてパソコンで）。私の感想はともかく、見た人の評価をネットで見てみた。アカデミー賞を獲得しただけあって、専門家の評価はきわめて高い。一般の人の評価はどうであろうか。

1つのサイト（https://eiga.com/movie/91131/review/）で見ると、だいたい5点満点の5か4の称賛が7割、3の中間が1割、2か1の酷評が2割という割合で、一般の人の評価もおおむね高い。

その中身を見てみると、称賛（４＆５）は「経済格差を縦の構図を巧みに用いて描いた演出センスに脱帽する。何から何までセンスが良い作品だ」「貧富の差の拡大というグローバルに深刻化する問題を取り上げ、予測のつかない超一級のエンターテイメントとなった」「最初から最後まで引き込まれ、あっという間の2時間。エンディングも最高」。など。中間（３）は「面白いが、深さ・鋭さには欠ける」、酷評（１＆２）は「目で見るだけの映画　何も入ってこなかった！共感する事もなく感情移入する事もなく 考えさせられる事もない」「パラサイトは刺激的ではあるものの素材が調和していない感がある。最終的に富裕層も貧困層も救われず、後味も最悪な映画だった」「評判がよかったから期待してみたけど、本当につまらない作品。色々な感性があると思うがこれを面白いと評価する人が信じられない。時間の無駄。アカデミー賞もたいしたことない。」などである。

全体では称賛が多いが、そうでない評価も少なからずあり、同じ映画でも見る人によって評価が違うことがわかる。 これは本や音楽についても同様に言えることであろう。

このことから、自分が好きや感動したからと言って人に薦めると,迷惑がられることがあることを自戒しておこうと思った。(とかく教師は自分の好きな本やドラマや音楽を学生に無理やり押し付け勝ちであるので）

O

ＮＨＫ特集ドラマ「バーニング」を観る。

昨日（29日）、新聞のテレビ欄に村上春樹の「納屋を焼く」（1980年）が原作の韓国映画がＮＨＫの第1で放映という記事を見て、軽い気持ちでテレビのスイッチを入れた。

その映画のすばらしさにびっくり。

村上春樹の1980年の原作が、現代の韓国を舞台に、韓国の巨匠の監督が、韓国の有名な俳優を使い、日本語の吹き替え（ヨン様の声も）で、映像も素晴らしく、内容がミステリアスで、久々にいい映画を観ることができたと感じた。

凡庸な私には今、この映画の魅力を言葉にできない。原作も読み返し、いろいろネットにある解説も参照しながら、この感動の理由を解き明かしたい。（ネットの解説の一部を転載）。

＜ドラマのきっかけは作家・村上春樹さんが2012年に書いた、新聞への寄稿文でした。

当時、尖閣諸島をめぐる問題、そして竹島の問題など、日中、日韓の領土問題が注目を集めていました。村上さんは朝日新聞への寄稿文（2012年9月28日）で、領土問題は避けて通れないイシューだが解決可能な案件であるとして、「我々は他国の文化に対し、たとえどのような事情があろうとしかるべき敬意を失うことはない」という静かな姿勢を示すことができれば、それは我々にとって大事な達成となる、と記しました。

この村上さんの思いをもとに始まったのが「アジアの映画監督が競作で村上春樹さん原作の短編の映像化に取り組む」プロジェクトです。（中略）

原作『納屋を焼く』が書かれたのは1980年代。監督のイ・チャンドンさんは舞台を現代の韓国に設定しました。監督は、原作を読んで、映画的な方法によって多層的なミステリーに広げることができると感じたそうです。

ドラマのストーリーには、原作を忠実に映像にしているように見える部分と、原作をもとに監督が大胆に物語を引っ張っている部分があります。

小説家を目指す青年が、同じ農村で育った幼なじみの女性と都会の片隅で再会する。２人はひかれあう。しかし、女性が旅行先のアフリカで出会った謎の男を男性に紹介したことで、３人の運命は複雑に絡みはじめる。ある日、女性と一緒に青年の家を訪れた謎の男は、夕暮れのベンチで秘密を打ち明けた。「僕は時々ハウスを燃やしています──」。そして……、というもの。www6.nhk.or.jp/nhkpr/post/original.html?i=16862＞

＜村上春樹の短編小説にアジアの巨匠監督たちが挑む！イ・チャンドン監督が選んだのは「納屋を焼く」。舞台を韓国に移し、3人の若者たちが織り成すミステリー世界を大胆に映像化した。何が真実で、何が現実なのか？監督が仕組んだ繊細かつ大胆なストーリーから目が離せない！

主演3人は、韓国の人気俳優ユ・アイン、世界的スターのスティーブン・ユアン、大抜擢の新人のチョン・ジョンソ。さらに、吹替を担当したのは、柄本時生、萩原聖人、高梨臨。緊張感あるストーリーを声の演技で盛り上げる。繊細な心の動きをつむぎ出す演技に注目！

放送日時:　BS4K 12月2日（日）午後9時00分～ ※BS4K再放送 1月3日（木）午後5時00分～　総合 12月29日（土）午後10時00分～

http://www4.nhk.or.jp/P5336/＞

追記１　村上春樹の「納屋を焼く」の原作をまだ読み返していないが、その原作も作者により改編されていて、そこには作者の本質的な視点が込められているようだ。卒業生のＩ氏が優れた文芸批評を送ってくれた（下記）。

「納屋を焼く」は何かの比喩とは感じていたが、それが「殺人」の比喩とは気が付かなかったし、「殺人説」をめぐってこのような複雑な議論があるとは思いよらなかった。文学の世界は深い。村上春樹にも敬服（この映画は、村上春樹の小説をかなり忠実に再現しているような気もする）

追記２　上記はNHKのBSで放映されたものの感想だが、その後、劇場版（こちらの方が長い）を見る機会があった。同じ映画とは思えない感想をいだいた。特に終わりの部分だが、とても酷い場面があり、全体に、村上春樹のシニカルであっても軽い、さわやかなトーンが消えて、酷さだけが印象に残った。自分の見る時の気分によって、映画の印象がこんなに変わるのであろうか。それともBS版と劇場版で作りが違うのであろうか。いつか確認してみたい。